夢見丘で夢を見る

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢見丘で夢を見る

【Ｎコード】
Ｎ４６０２Ｍ

【作者名】
朝昼夜

【あらすじ】
よろしくお願いします

夢見丘では、たくさんの人間が、頭から突き刺さっている。
全員、夢を見ているのだ。
そんな丘を見下ろしながら、宙に浮かんでいる人間が、数人で何やら話し合っている。
「夢と現実というのは、本当はどっちが良いものなのか近頃はわからないんだ」
「そんなの現実に決まってるだろ。あそこで眠っている連中は全員、恥知らずだ」
「だがまあ、最近、あそこで眠りたい気持ちばっかりが溢れてたまんないんだ。何せ、夢見丘で見る夢には女神が出てくるっていう話だしな」
「それはデマだよ。夢見丘で眠っている連中が、現実でしっかりと生きていないことに罪悪感を感じているから、仲間を増やそうと思って都市伝説的な情報を垂れ流してるんだろ。女神って聞けば、そりゃあ見たくもなるからな」
「そうなの？」
「そうだよ」
「まったく、お前は単純だよなぁ」
「ほんと、ほんと」
現実で生きているその数人たちは、声を合わせて大声で笑った。だはは、と和気藹々である。
笑い終わってから、誰かが言う。
「…ほら、こうやって、現実で話をするだけでも楽しいもんだよ。こうやって笑いあうことは面白いんだから、夢見丘で眠る必要なんてまるでないぜ。それに、丘であんな風に下半身をもろ出しにして突き刺さるなんて、みっともないよな」
「ははは、それもそうか」

というわけで、その数人たちはまた夢見丘を見下ろした。「まったく馬鹿だよなあ」なんて言いながら、声を合わせて笑い合って、楽しんでいるのである。
そんな時に、彼らにとって嫌なものが現われた。
悪魔である。
悪魔はこの現実の世界でもっとも不愉快な存在として、数人の彼らはかなり悪魔のことを嫌っていた。というのも、見てるだけでイライラするからである。
「やぁ、みなさん」悪魔は卑屈な調子で挨拶をする。
「あいあい」「どうも」「あっちいけよ」
何ていう風に煙たがると、悪魔は何がおかしいのだろうか、けたけたと笑う。
「そんなに嫌がらないでくださいよ。わたしだって好きで悪魔なわけではないんですから。あなた達から見てわたしは不愉快な存在なのかもしれませんが、しかし、わたしはこの世界に居る限り、死ぬことは無い不滅の存在でもあります。ですから、あなたたちにも耐えてもらう他ありません」
「お前も夢見丘に突っ込んじまえばいいんだ」
誰かが怒鳴った。だが悪魔はその怒号も、けたけた笑いで受け流した。
「出来るもんならやりますが、わたしは人間ではありませんから夢を見ないんです」
「不愉快なやつだ」「ほんとうに不愉快だ」「言葉を聴いているだけでイライラする」「生理的な不愉快さだ」「どうしようもない不愉快さだ」
数人たちが、次々に、繰り返す。かなり嫌そうな顔つきをそれぞれがしていて、尋常の様子ではない。彼らにとっては、それ程に悪魔は不愉快な存在なのだ。
悪魔は、罵詈雑言の数々を、やっぱりけたけた笑いで受け流し、最後にこう言った。

「不愉快な思いをしたくないなら、あなた達が夢見丘へと向かう他ありません。何せ、わたしはあなた達の目の前に、毎日現れては不愉快な思いをさせることが使命なのです。わたしは、悪魔ですから」

ある日、数人の内の、気弱な男が、言う。
「オレ、夢見丘へ行くよ」
数人の中でどよめきが湧いた。現実を生きると決めている彼らの結束が揺らいだのは、久しぶりのことだった。
「それはやめておけ」
「もう耐えられないんだ」
「夢を見てどうすると言うんだ。まさか女神の話を信じているわけでもあるまいし。現実の世界にいれば、こうやって俺達で笑いあうことが出来るんじゃないか」
「不愉快なんだ、悪魔を見るのは」
「お前、それはお前だけじゃないんだぞ。不愉快なのはみんな一緒じゃないか」
「それでも、だめなんだ。……みんな笑ってくれていいよ。俺は、弱い奴だ！」
気弱な男はそう叫ぶのを最後に、勢いをつけて、宙を間ッ逆さまに落ちていった。

――ズボッ

「ああ」「あの野郎」
みんな嘆息したが止めることは出来なかった。気弱な男は夢見丘に突き刺さった。
下半身はもろだしで、上半身は土にうずめたのである。
「夢で生きるなんてずるいことじゃないか。オレたちは現実で生き

てこそ、正しいっていうのになぁ」
気性の荒い男が喚いた。だが、なぜだか、誰も頷かなかった。
数人たちの結束が破れる始めていた。
そのうち誰かが呟く。
「さっきの、ズボ、っていう音、気持ち良さそうな音だったなぁ」
その言葉で火が点いた。
「オレも思った」「ズボ、だぜ」「なんだか眠くなってきたぜ」「悪魔を見るのはもう嫌だなあ」「おれもおれも。不愉快な思いはもう嫌だぜ」
瓦解はまったくもって早かった。次々に、数人たちは夢見丘へと間ッ逆さまに落ちて行き下半身をもろだしにした。次々、次々に突き刺さっていき、どんどん減っていく現実組。
何時の間にか数人は、気性の荒い男と、ぼーっとした男だけになってしまった。
気性の荒い男が言う。
「あいつら、意思薄弱なヤツラだぜ！　あんなにダメな奴らだとは思わなかった。……あんなに下半身をもろだしにして、恥ずかしくないのかよ。なあ、お前もそう思うだろう？　やっぱり、現実で笑い合っていたほうがいいよな。たとえ不愉快な悪魔を毎日見るにしたって、一時的に耐えればいいだけの話だ」
だが、ぼーっとした男は頷きはしなかった。
「うーん。僕もいろいろと考えはしたんだが、まあ、現実も具体性のあるところじゃないしねえ。宙に浮いて、いつも同じような話をするだけで、その癖、悪魔で不愉快な思いにさせられる」
と、ぼーっとした男は、今までの現実を否定するようなことさえも言ってのけた。
気性の荒い男は、憤慨した。
「なんだ、何だ貴様、なんだ、なんだ貴様！　今までは楽しそうに笑ってた癖に、ちょっと疲れてきたからって根性が座ってないなあ！　……まあ、いいよ！　お前が下半身もろだしにしたって、別に

オレは気にしたりしないさ。現実を投げ出して夢へと逃げ出せばいいさ。だけどオレは逃げ出さないぜ、オレはここで悪魔の不愉快さを耐え続けてみせるぜ。それこそが現実で生きるってことだからさ」
気性の荒い男はそこまで言い切ると、ふう、と息をついた。
ぼーっとした男は、ぼんやりとした微笑を浮かべた。
「そうか。頑張ってくれたまえ」
そう最後に言い残して、ぼーっとした男は、間ッ逆さまに落ちていった。
そして、下半身を剥き出しにしたのであった。

「……ちくしょう、根性無しどもめ。なんもわかっちゃいないぜ、現実がどれだけ大事かってことにも気が付いていないで、夢にばっか走って。女神がそんなにいいかよ。女神にそんなに会いたいかよ。……ま、オレはこれからも現実で生きるけどね」
　気性の荒い男は、夢見丘を見下ろした。以前よりも下半身むきだしが増えているそこは、とても圧巻たる光景ではあったが、馬鹿らしくて見てられなかった。尻ばっかが並んでる丘なんて、見てるだけで恥ずかしくなってくる。
「悪魔の野郎が悪いんだ。あいつの不愉快さがなければ、みんな、あんな恥ずかしいことはやらないのに」
そんなことを愚痴っていると、向こうの方から、噂の張本人が気性の荒い男の視界に入り込んできた。
「あの野郎」
不愉快な気持ちを抑え付けながら、ひたすらに恨み言をぶつぶつ呟く気性の荒い男。
そんな彼の目の前にまで悪魔は飛んできて、羽を止めた。
「やあやあ、ついにあなた一人になってしまいましたか。なんでそんなに頑張ってるんだか知りませんが、まあ、偉いですね」

気性の荒い男は、その言葉を聞いて、普段は不愉快さしか感じないのに、この日は怒りが湧き上がっていた。ぐつぐつと、燃え滾るかのように。
「きさま、むかつく言い方をしやがって」
怒りを込めた言葉をぶつけるが、悪魔はへらへらしている。
「何でむかついてるんですか。むかつくくらいなら、夢見丘に落っこちてしまえばいいじゃないですか。それとも現実にそれ程の未練があるんですかね。何であなたはそんなに頑張っているんだか、悪魔のわたしにはわからないなあ、ひっひゃほう」
気性の荒い男は、さらにムカついた。
「貴様にわかるものか！」
怒鳴ってから、夢見丘へと視線を再び動かす。下半身がむきだしが一杯。気性の荒い男はさらにむしゃくしゃした。尻に馬鹿にされているような気がした。
彼は、宙で地団駄を踏んだ。
そんな彼を、悪魔は哀れな目つきで見てから、しかし笑った。
「はあ。そろそろ解って欲しいのですが。何ゆえわたしが今まで毎日、あなたたちに不愉快な思いをさせてきたのかと言えば、あなた意外の方には、その効果は十分に発揮されてるはずなのになぁ。みんな、『こんな毎日に意味無し』って気が付いたから、夢見丘に突き刺さって尻をむきだしになったというのに。あなたは現実にしがみついてばかりだ。中身がある現実ならばいいが、あなたの現実は、夢と同じくらい中身が無い」
悪魔の突然の、説教らしき言葉。気性の荒い男は唖然とした。
「中身がないだと？」
彼は、頭を抱えた。
「中身があるというならば、反論してみれば良い」
悪魔はほくそえんでいる。気性の荒い男はムカついたが、言葉が出てこない。
残念ながら、彼の場合、本当に中身がなかった。

「うへへ、うへへへ、ひゃっほう」
気性の荒い男は、なんだかどっかで見たことがあるような、典型的な狂い方をしながら、宙で踊りまわった。そして、「オレをどっかに連れてってくれぇ。オレをどっかに連れてってくれぇ」と繰り返し言うので、悪魔はあまりのおかしさに腹を抱えた。
その後に、気性の荒い男の頭を掴んで、彼を夢見丘へと放り投げてあげた。
彼は上半身から丘に突き刺さり、先にむきだしになったみんなと同じように、彼もむきだしになり、尻を恍惚と、勇ましく。

悪魔は鳥へと姿を変えた。
「ああ、めんどくさかった。夢の番人なんて仕事、やっぱり面倒くさいだけだなぁ。夢の世界に居座った人間を追い出すのがこんなに面倒だなんて知らなかったぜ、まったく。しかし、人間というのは本当に厄介なものだな。夢と現実をごっちゃにするわ、宙に浮かべる生物じゃないくせにそのことを違和感にも感じないわ。こうやって悪魔に身を変えて不快な思いをさせないと、あいつらは夢から出て行こうとしない。いつまでも幻想の中で佇んだままだ。それほど人間というのは脆弱なものなのか、それとも現実があまりに過酷なのか。ま、鳥のわたしにはまるで関係の無い話だな。オレは夢なんてみないから、夢の心地よさなんて知らないし。でもまあ、一度は見てみたい気もするな。なんたって、これだけの数の人間が夢を見るために、わざわざ宙に浮かび上がってくるんだからな……」
鳥は、翼を広げ、ゆっくりと青空へと飛び立った。
どこまでもどこまでも、羽を羽ばたかせて、消えていった。

男は、ベットの中で目を覚ました。
もう、夕暮れ時だった。
「ああ、痛い痛い。頭が痛い。あれ、オレは今までどんな夢を見てたんだっけ。なんだか気分が良い夢を見ていたような気もするが…」
彼はベットから身を起こした。すると同時に、頭の中に現実が浮かび上がってくる。
「ああ、いやだいやだ、現実めんどくせー。オレは意気地無しで根性なしな人間。気合と根性のある人間だったら、こんな劣等感まみれの人生を送ることなんて無かったのだろうに……。ああ、夢でもいいから、気合と根性のある男としての毎日を、体験してみたいものだなぁ」
男は窓を開けた。鳥が飛んでいる。
頭で何かがチラついたが、なんだか正体がよくわからないので気にしない。

夕日の中に鳥は溶けて、やがて、日が沈んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4602m/

夢見丘で夢を見る

2010年10月9日21時34分発行